

アイヌの物語文学における人称表現

中川 裕

一 アイヌの物語は一人称叙述文学か？

カムイユカラ「神話」、オイナ「聖伝」、ユカラ「英雄叙事詩」、ウエベケレ「散文説話」といったアイヌの物語が一人称叙述体で語られるということは、金田一京助が指摘して以来、ほぼ定説となっている。その起源的な問題について、金田一（一九二四）では、シノツチャと呼ばれる、自分の心情を即興的に歌いあげる歌謡形式を引き合いに出し、「此の叙述の仕方は勿論第一人称叙述で、全くオイナやカムイユカラと同一揆なのである。して見れば、オイナやカムイユカラの形式というものは、アイヌが自分等の歌の形に、之を神々に云わしたただけのことなのである」（金田一九二四（一九九二）96）と述べている。つまり、物語の一人称叙述の起源を叙情歌の形式の反映と見ていた。

しかし、金田一はその後折口信夫の示唆を受けて、巫女の託宣というものをその起源と考える説を打ち出すようになった。

「アイヌの口碑文学が、すべて第一人称に出来ている不思議が、久しい間の私の懸案で、人にも質し、物にも発表してその解釈を待ち望んで居たのであったが、之を託宣の形なのではないかと、一言解釈の曙光を最初に投じた人は、折口信夫氏であった」（金田一九三一 429）

金田一は巫女の託宣（歌）↓神話↓聖伝↓英雄叙事詩という歴史的發展関係を論じ、金田一の高弟である久保寺逸彦もこれを支持した。金田一のもうひとりの弟子である知里真志保は、神話の起源に関しては、巫女の託宣歌以外の様々なものを想定したが、一人称叙述という特徴と、それを軸にした物語の歴史的發展過程については、金田一説をさらに推し進め、現実のアイヌ社会の歴史的な發展過程と連動させて論じている。

しかし、これらの説には重大な欠陥がある。それは、彼らがもともとアイヌ語による表現から一人称叙述という観念を導いていながら、その後はアイヌ語自体の分析をそれ以上進めることなく、ただその一人称叙述という観念に乗って議論を

展開していったことにある。筆者はすでに中川（一九九七a、一九九七b）などでそれを批判してきたが、ここでその要点を整理し、アイヌ文学の人称という問題を改めて論じてみる。

二 アイヌ文学の諸ジャンル

日常のコミュニケーション以外のことを目的とする言語活動を広く「文学」ととらえると、アイヌ文学は、なんのためにその活動を行うのかという目的によって、次の四つに大きく分けられる。

- ・ことばあそび…その言葉を口にするこゝと自体を楽しむもの。ことばを使つて遊ぶもの。鳥や虫の聞きなし、早口言葉、なぞなぞ、などを含む。
- ・となえごと…その言葉を口にするこゝとによつて、依頼、命令、感謝、抗議などを行い、聞き手に何らかの影響を行使するもの。おまじないの言葉、呪いの言葉、挨拶の辞、死者への引導渡し、カムイ（神）への祈詞、などを含む。
- ・うた…言葉の内容自体よりも、むしろそれを節に乗せて音楽として演じるこゝとを目的とするもの。労働歌、子守歌、叙情歌、踊り歌、座り歌などを含む。
- ・ものがたり…できごとの顛末を形式化して聞き手に伝えるもの。

以下、ひらがなで書かれたこれらの名称は、上記の定義によるジャンル名として用いる。ものがたりはさらにいろいろな形式の下位ジャンルに区分できるが、多くの地域に共通した典型的なものとして、大きく次の三つを挙げておくことにする。

- ・散文説話…普通の人間を主人公とする。散文で語られる。節はつけない。
- ・神謡…カムイ「神」を主人公とする。韻文で語られる。それぞれの話に独自の節があり、サケへ（サハ）と呼ばれる。繰り返し句が挿入される。
- ・英雄叙事詩…超人的な力を持つ人物を主人公とする。韻文で語られる。語り手がそれぞれ自分の節を持っていて、それに乗せて語られる。

三 アイヌ語の人称

アイヌ語の人称は動詞および名詞の人称接辞によつて義務的に表示される。たとえば、シニ「休む」という動詞に対して、「私が休む」はクシニ、「あなたが休む」はエシニのように、クやエという人称接辞を前につけるこゝとによつて、誰が主体なのかを表す。このクやエは日本語の「私」や「あなた」と違って、前後の文脈から誰が休むのかはつきりしている場合でも、省略

することはできない。シニという形のままでの動詞を文中の主動詞として用いた場合は、第三人称者が主体であるか、命令文であるかのいずれかの意味にしかならず、「私」が動作主体であることを表すことはできない。

このような文法的な制約の存在によって、アイヌ文学は三人称で語られるものと、そうでないものを整然と区別することができ。そして、上述のものがたりというジャンルにおいては、パナンペ・パナンペ譚や、和人の昔話がアイヌ語化され取りこまれたものなど、通常散文説話の下位ジャンルとされるごく一部の話のみが、三人称で語られるのであり、大多数の話はそれとは別の人称によって語られる。それらの人称が通常「私」と訳されることよって、アイヌ文学は一人称叙述だと言われているのである。

しかし、アイヌ文学においてこれまで「私」と訳されてきた人称は、実際には三種類ある。その人称表示の実態はいささか複雑なものであるが、それを北海道沙流方言の他動詞主格接辞の形で代表させて、ク、チ、アと呼んでおくことにする。

「文学」中のテキストではなく、日常会話においては、この三つの人称は、次のような場合に用いられる。

- ク…話者自身を指す、通常の意味での「私」(一人称単数)
- チ…話者と第三者を含む「私たち」。ただし、聞き手は含まない(除外的一人称複数)。

ア…次のようなくつもの場合に用いられる。①聞き手を含む

- む「私たち」(包括的一人称複数)。
- ②丁寧に言う場合の「あなた」(二人称敬称)。
- ③不特定の「誰か」「人」(不定人称)。
- ④引用文中での「私」―つまり、実際の話し手とは異なる人物を指す「私」(引用の一人称)。

すなわち、日常会話において純粋に「私」にあたる一人称と呼べるのはクだけであり、後のチ、アは、通常は「私」以外の人物を指すのに用いられる人称である。しかし、アイヌ文学が一人称叙述であるという時、それはクという人称で語られるということの意味しているわけではない。

アイヌ文学において、実際に言葉を発する人物を「語り手」内容の上で視点がおかれ、その人物の発言として語りが進められていく人物を「叙述者」とすると、各ジャンルの叙述者の人称は次のようになる。

ジャンル	サブジャンル	語り手	叙述者の人称
うた	叙情歌	語り手	ク
	神への祈詞	語り手	ク(原則的に)
	散文説話	語り手	ア
ものがたり	英雄叙事詩	語り手	ア
	神話	語り手	チまたはア

ものがたりにおいては、語り手≠叙述者であり、三人称で語が進められるパナンペ譚のようなサブジャンルをのぞいては、

多くの場合叙述者＝主人公である。主人公の視点から物語が叙述されていくため、これらの人稱は「私」と訳されることになる。散文説話および英雄叙事詩においては、この主人公の人稱はクではなく、アで表される。次に英雄叙事詩の例を挙げる。

例一・英雄叙事詩 沙流郡平取町 木村きみ氏 一九七八年七月十五日 中川裕採録

カネ	ハヨクベ	黄金の鎧を
アサンケ	ヒネ	私は出して
ハヨクベ	ウツソ	鎧の中に
アオマ	ワ	私は入り
ハヨクベ	ヌマツ	鎧の結び紐を
アヤイコユブ		私は締め上げ
タパクノネコ		それから
カネ	ボンカサ	黄金の兜を
アノツキリ	タ	私の顎に
アヤイコユブ		私は締め上げ
エヌネ	キナ	そうして
カネ	ランケ	黄金の太刀を
アコシトメチウ	タム	私は腰に刺して

金田一および久保寺は、このような散文説話と英雄叙事詩で主人公を表しているアを、「雅語の一人称」として、「口語の一

人稱」であるクとの違いは、「我」と「私」のような文体差だと考えた。この説に従えば、このようなものがたり中のアは、日常会話におけるアとは同音意義の別の形式ということになり、これらを一人称叙述と称することに問題はなくなる。

しかし、この考え方には欠陥がある。久保寺（一九七七）では「雅語の用いられる場合」として「(1)正式の会釈・会見の詞 Uwerankarap-*iak*、(2)神禱の詞 Kanui-nomi-*iak*、(3)誦呪の詞 Ukewehonshu-*iak*（悪魔払いの際、神々や人々に対して、あるいは、互いに羨まきことを祝福し合う際に用いられる）、(4)談判の詞 Charanke-*iak*、(5)詞曲の詞 Yukai-*iak*等」（久保寺一九七七：5）としている。しかし、これは実際の用例とは一致しない。そのひとつとして、久保寺が同書中、その雅語の用例を示すために神禱の詞として挙げているものの一部を示す。

例二：辺富内（現在の勇払郡富内）森本エカシモ氏 一九四一年八月十五日 久保寺（一九七七 13-14）

kimatek tap	慌て驚きし
ku-ne akusu	我なれば
yai-asurani	事の仔細を（神々に）告げ
ku-ki hawe-ne.	【我】知らせ奉る次第なり。
Kina-ushi kotan	杵臼村の
kotan sermaka	村の背後を
ko-punkine utar	守りいます神々の

ko-haita kunip

守護に手落ちありとは

ku-yay-niukeshie na.

我なし難し。

この神禱の詞は韻文形式になつており、カムイ「神」に対して語りかける形式として、雅語という文体をとっているということには異論がないのだが、語り手＝叙述者の人称はクであり、アは用いられていない。神禱の詞というものについては、一般にどの意味でどういう人称をつかうか、まだ明瞭になつていない部分も多いのだが、基本的にその中で「私」と訳される人称がクで表示されていることが多いということは言える。したがって、アとクの違いを雅語と口語という文体に結びつけて考えることはできないということがわかる。

一方、知里真志保(一九四二)は、これらの人称の違いを、「日常語語法」「叙事詩語法」「神謡語法」による違いととらえ、雅語対口語という文体の差ではなく、ジャンルごとの文体差と考へた。これによって、同じく雅語とみなされる神禱の詞と英雄叙事詩などとの間の人称の違いについては問題にならなくなったが、文体的にかなり異なる散文説話と英雄叙事詩において、なぜ同じ「叙事詩語法」で語られるのかの説明はなされておらず、また叙事詩の中のアと日常語(口語)のAの間の関係についても、「文学語と日常語とは人称接辞の種類と価値とを異にする」(知里一九四二(一九七三) 492)と述べているだけである。

そこに踏み込んだのが、田村すず子(一九七二)である。田

村は散文説話や英雄叙事詩について、その全体が長大引用文であると考へ、Aの日常会話でのひとつの用法である「引用の一人称」がそれらに適用されているのだと考へた。

「叙事詩や昔話などの中で『私』というのはその中の登場人物であつて、語り手自身ではない。実際そういつた口承文芸の多くは、最後が『……とさ』とか『……とどこそこの老人が言いながら死んでいった』とかいう表現で結ばれ、その全体が——たとえ語り終えるのに二晩もかかる長いものであろうとも——引用句をなしているのである。だからその中の一人称者を表わすのは当然引用の一人称の形式となる」(田村一九七二 27)

これによって、雅語と口語をひとつの同じ人称システムで記述することが可能になり、散文説話と英雄叙事詩の主人公が、なぜ同じAで表示されるのかの説明も可能になった。しかし、散文説話や英雄叙事詩のAは、これまでテキストが採録されてきたほぼ全域で共通しているのに対して、引用の一人称という用法の存在が確実に報告されているのは、沙流方言のみであるということから、沙流方言以外の地域に対して、ひいては歴史的な起源論において、これらの主人公の人称がすべて引用の一人称として説明できるかどうかは、まだ問題として残っている。

もうひとつの問題は、ものがたりの中で神謡というジャンルにおいてのみ、クでもAでもなく、チという人称が主人公を表すものとして用いられていることである。これについては、叙述者であるカムイ「神」が語っていることを示すために、人間

とは異なる人稱を用いているというのがこれまでの説明であり、おそらくそれ以上にあり得そうな説明は今のところない。

「この人稱法【神話における人稱】の特徴は、第一人稱に於てのみ特別の代名詞【チを指す】を用いることに在るのであって、それは神が人間と異なる言葉で自分を区別する意図に発したものであるらしい」（知里一九五四 13）

しかし、チは日常会話において「聞き手を含まない私たち」すなわち除外的の一人稱複数を表す形式である。なぜそれがカマイの人称としてあてられているのかについて、佐藤（二〇〇四）は「複数形を用いて指示対象を曖昧化する『迂言』の一種」とみなし、「そのような表現を用いることで、ある種の文学的効果を生みだしていると考えられる」（佐藤二〇〇四 181）としている。おそらくこれが現在のところ叙述者が複数形で表現されることを説明する、最も妥当性の高い解釈であろう。

四 「私」の使いわけの条件

これらの人稱の用法を通時的に考えてみた場合、アは誰を指しているのかをぼかす不定人稱が本来の用法であったと考えられる。包括的の一人稱複数という用法も、二人稱敬称という用法も、特定の人物を指さないと、この不定人稱の用法のひとつの現われとして説明できる。しかし、叙事詩の主人公や、沙流方言における引用の一人稱は、特定の人物を指す用法であり、

不定人稱からは直接説明できない。

そこで、アは不定人稱が起源的な用法であるが、一、二、三人稱と対立する第四の人稱形という人稱体系内の位置から、一、二、三人稱のどれを使っても指すことのできないような人稱を表す用法を發展させたと考えてみたい。話し手自身とは異なる叙述主体というのはまさにそのひとつである。すなわち、散文説話や英雄叙事詩の叙述者Ⅱ主人公の人稱は、視点がそこにおかれているという点で二人稱者でも三人稱者でもないが、語り手自身では無いので、一人稱者でもない。それを示すために、クではなくアが用いられるのだと考えられる。これを「叙述者の一人稱」と呼んでおく。

これは田村の言う引用の一人稱と原理的に同じ説明である。しかし、通時的なことを問題にすると、多くの方言でものがたり中のアは、不定人稱と同じく動詞の複数形としか結合しないのに対し、沙流方言を中心とする一部の方言では、意味的に単数の行為者を示す場合、アは単数形と結合する——つまりものごたりの主人公は単数形で表されるという用法が発達しているという特徴が挙げられる。そしてその動詞単数形とアの結合は、同方言の引用の一人稱にも同じように見られる。前述のように、ものがたり中のアの用法の方が引用の一人稱より普遍的に見られることを考えると、不定人稱から動詞の複数形と結びついた「叙述者の一人稱」の方が先に成立し、沙流方言で動詞の単数形との結合——すなわち特定の個人を指す用法の明示化——が起こ

ると並行して、日常会話の中でも引用の一人称としてアが用いられるようになったという可能性を考えてみる必要がある。⁽¹⁾

一方、神話において全編を通してチで語っているのは、実際には比較的短いものがごく一部の地域の資料だけである。知里幸恵(一九二三)『アイヌ神話集』が後者の代表例だが、これは最初から伝承者自身によって書かれ、推敲を加えられたテキストであることから、それが人称がチで統一されていることの原因である可能性もある。沙流地方などでは、チで語られるのは一部分のみで後はほとんどアで語り進められるということが多く、全編アで語られることも少なくない。

例三…火の女神の神話 沙流郡平取町 木村きみ氏 一九七八

年七月十五日 中川裕探録

サケヘ…☆アペメルメルコヤンコヤンマツ

★アテヤテンナ

*アペメルメル

☆★

☆★ ウ クンネ ヘネ

☆★ ウ トカッ ヘネ

☆★ ケメイキ バテッ

☆ チキ パ キ ナ

☆ チケムルオカ

夜も

昼も

針仕事ばかり

私はしていました。

私の針の後ろ

☆ チケムルエトッ 私の針の前を

☆ トウ イメル クル ふたつの光

レ イメル クル 三つの光が

コトウイトウイケ ナよぎります。

☆ タパンベ バテッ そんなことばかり

* ネッキ ネ チキ 私は仕事にしていました。

(中略)

☆★ アソカラ ホク 私の夫

☆ トウラノ と一緒に

アアンテ ホク 私の旦那

トウラノ カイキ と一緒に

☆★ ウ ラツチタラ ゆっくりと

ウエネウサラン コロ 私たちは四方山話をしながら

☆★ ウ アラパアン ヒネ 私^{*}は行って

アウン チセ タ 私の家に

☆★ ウ アラパアン ヒネ 私は行って

オロワノ そして

ウ ラツチタラ 静かに

☆★ オカアン キ ナ 私たちは暮らしました。

*アはアラバ「行く」のような自動詞に接合した場合、接尾辞アンの形をとる。

この例では、冒頭部において「私」はチで表されているが、途中でアに替わり、そのまま最後までアで通している。このような語り方は、沙流方言の資料としてはむしろ普通である。こうしたチの用い方は、かつて全編をチで語った名残と考えられており、私自身もこれまではそう考えていたのだが、神謡などのジャンルはテキストを丸暗記して伝承するわけではないのに、人称のような文法現象において、古い形式が部分的に残存して出てくるということが果たしてありえるのかということとは、あらためて問題にする必要がある。

むしろ、「ものがたり」の叙述者の基本的な人称はやはり「叙述者の人称」アであるのだが、神謡の場合、その叙述者がカムイであることを示すために、ポイントとなる部分でチを用いるという技法が発達した。ただし、それを実際にどの程度まで適用するかは、地域により個人により差があるという解釈のほうで、一回一回が創造的な語りであるはずの、「ものがたり」の口誦のあり方としては適当なのではなからうか。この点については中川（二〇一一）で詳述することにする。

いずれにせよ、叙述者の視点から話が進められるということとを一人称叙述というのであれば、アイヌの「ものがたり」はまさしく一人称叙述である。しかし、語り手の視点から話が進められることを一人称叙述と呼ぶのであれば、それは「ものがたり」ではなく、クを用いる「うた」や「となえごと」のほうであるということ、強調しておく必要がある。

「となえごと」は、語り手自身が自分の思いを聞き手に伝えるものであるから、そこでの叙述者は語り手自身であり、したがってクが用いられるということに問題はない（実際はかならずしもクで語られない場合もあるが、ここではこれ以上論じることができない）。しかし、「うた」の中の叙情歌と呼ばれるサブジャンルは、自分の心情を即興的に歌いあげるものだと言われているが、実際には伝承された歌を即興的にアレンジしながら歌うことも多い。

例四・叙情歌 千歳市 白沢ナベ氏 一九九三年六月四日 中川裕採録

イタ	ルイカ	ルイカ	カタ	板の橋の、橋の上で
カワイ	ポン	サンチャイ	かわい	若い若い三歳馬に
コ（クオ）	キ	キ	アワ	私が乗ると
カワイ	ポン	サンチャイ		かわい
ウ	ルイカ	カタ		橋の上で
クチワ	コチャンチャン			轡をしゃんしゃん鳴らし
ナリワ	コチャンチャン			首の鈴をしゃんしゃん鳴らし
ホユブ	フミ			走る音を
エネ	ネ	ペコ		そんなふう
クヌ	ヒ	タシ		私は聞いた。
ナリワ	コチャンチャン			首の鈴をしゃんしゃん
クチワ	コチャンチャン			轡をしゃんしゃん

セコン ネ ペコロ

というふうには

ホユブ キナ

走ったのだよ。

ヤイサマネナ

ヤイサマネナ

例四は、千歳の白沢ナベ氏が若いころ他の人から聞いて覚えた歌だが、自分自身の体験ではない。そればかりではなく、この歌は白沢氏自身の説明によれば、若い女性を馬に仮託して男性が女性との密会を歌った艶笑歌であり、叙述者は明らかに男性である。したがって、白沢氏自身が自分の心情を述べたものとして歌うには不適當な歌である。それにもかかわらず、ここではクが用いられている。ものがたりの人称から考えれば、ここでもアで歌われてしかるべきところであるが、このような内容のものでも、うたではクで歌うのが原則である。

このような現象を説明するには、語り手と叙述者だけでなく、聞き手という要素を持ちこまなければならぬ。

・となえごとものがたりには、必ず聞き手が必要である。

・うたは、必ずしも聞き手が必要としない。

ものがたり中のアは、その話の叙述者が語り手自身とイコールではないということを示す形式だが、それを示さなければならぬのは、聞き手が存在するからである。すなわち聞き手と相対している人物の体験ではないということ、聞き手に認知

させるための形式と考えられる。一方、アイヌのうたは、聞き手を楽しめるために歌うものではなく、歌い手自身が楽しむものであり、聞き手は必ずしも必要ではない。人によつては叙情歌は山仕事などでひとりである時に歌うものだという人もいる。したがって、聞き手に対してそれが語り手（歌い手）自身のことではないということを示す必要がないため、クをアに改める必要がないのだと考えられる。

では、なぜ自分が実際に体験したことのない、自分の心情とは言えないような内容のものを、クを使って一人称で表示するのか？ 巫女の託宣歌↓神謡↓聖伝↓英雄叙事詩というものがたりの歴史的發展仮説には、うたの入る余地がないが、うた―特に叙情歌がなぜ常に本来の一人称単数形であるクで歌われるのかということは、アイヌ文学の一人称叙述性という問題を考えるにあたって、やはり追及されるべき事象だろう。

五 一人称叙述の起源

シンポジウム当日の質疑応答において、私が、金田一らの唱える「巫女の託宣歌」を出発点とする發展史観を「一度御破算にしたほうがよい」と述べたことに対して、否定的な意見が出されたが、この金田一らの説については、すでに萩原眞子が疑問を提示している。萩原はアイヌ民族に隣接する諸民族の「巫歌」について調べ、それらにおいて「一人称叙述体の託宣が非

常に稀であることに気づく」(萩原一九九六 357)と述べる。そしてその大きな理由は「シャマンのトランス状態で発せられる託宣のことはが往々にして不明瞭で理解し難いことにある」(同前)とする。実際問題として、金田一らが巫女の託宣歌として引いているテキストは、巫女がトランス状態で語ったものそのものではなく、「いずれも、すでに久しく多くの、殊に女性たちの間で繰り返し語られてきた、いわば『伝承された』巫謡と言うことになる」(前掲書 358)。

そのひとつとして、胆振の弁辺というところに住む巫女が、隣の虻田に住む女性の病気についてその原因を告げたものと言われる託宣歌がある。これは金田一京助も久保寺逸彦も、託宣歌の代表例のようにして論じているものであるが、知里真志保がその一部を原文対訳で紹介しているものを見ると、最初にクモ、次にサクソモアイエツという竜蛇が叙述者となって語っている。叙述者の人称はチで一貫しており、サケヘがついていて、形式的には神謡と区別つかない。それだけでなく、原文は省略されているが、この託宣歌の最後は「その託宣では、酋長の妻がいちばん大切にしている小袖や首飾りの玉や耳輪などを与えれば、万が一にも助かるかもしれないのだが、酋長の妻は死んでもそれを手放すまいとしているから、とても助かりっこない、と出た。この酋長の妻は、最後までそれらの品を手放すことを拒否し通して、まもなく死んで行ったということである」(知里一九六〇(一九七三) 121)ということになっている。つまりこれは巫女の口から出た託

宣そのものではない。後日談まで含んだ「ものがたり」なのであり、神謡の形式にそれを整えたものと見てよい。言い換えれば、これがチで語られているというのは、神謡という器に盛られたからだという見方もできるのである。

「村人が巫女を通して神意を問い、神が巫女の口に出て、その飢饉、その暴風の生じた理由から、それが収まった所以を述べた口を、そのままの形として伝えられているのであることを、我々はあの第一人称説述体の文体から想像することができるのである」(金田一九三一 421)と、金田一京助は述べている。「あの」というのは神謡のことを言っているのであり、それが巫女の託宣から発展したから一人称だというのは「想像」であつたはずである。しかし、それが後には「巫女の託宣歌」の第一人称表現形式は、『神謡』に継承せられる」(久保寺一九七七 199)のように、動かない事実として語られるようになる。

こうした点を、もう一度ちゃんと検証してみようというのが、「二度」破算にしてみる」という発言の趣意である。冒頭で述べたように、金田一京助自身は、「オйнаヤカムイユカラの形式というものは、アイヌが自分等の歌の形に、之を神々に云わしたたけのことなのである」と述べて、「うた」と「ものがたり」の叙述形式を同じものとみなしていたこともあつた。この考え方自体は、その後一度も再検討されたことがない。しかし、うたをなぜ一人称で歌うのかということ、ものがたりをなぜ一人称で語るのかということ、無関係に論じるべきものではないはずである。

アイヌ語のテキストは、人称が人称接辞という形で明示され、しかもそれがジャンルごとに、あるいは語りの流れの中で、複雑に使い分けられている。そのような点から、語りと人称という問題を考える上で、非常に豊かな材料を提供するものである。したがって、アイヌ語原文に即して、さらに深く広く分析していくことは、アイヌ文学研究のみならず、口承文芸の理論的研究においても重要な成果をもたらすものだと考える。

注

(1) 筆者は中川(一九九七)で、叙事詩や散文説話の叙述者について、不定人称で語られるのが本来の形式であったかもしれないという解釈を行ったが、それについて佐藤知己は「不定人称の代名詞がアイヌ語の口頭文芸では多用される、という結論になってしまう」(佐藤二〇〇四179)と批判した。四人称の各用法のうち、不定人称は対応する代名詞を持たないと考えるべきであり、この批判は正当なものであると認め、本稿のような考えに改める。

参考文献

- 萩原真子(一九九六)『北方諸民族の世界観』草風館
金田一京助(一九二四)「アイヌの叙事詩に就て」『東亜之光』
19-3 『金田一京助全集』第七卷(一九九二)三省堂
金田一京助(一九三二)『アイヌ叙事詩ユーカラの研究』東

洋文庫

久保寺逸彦(一九七七)『アイヌの文学』岩波新書
佐藤知己(二〇〇四)「アイヌ文学における一人称体の問題」『北
大文学研究科紀要』112

田村すず子(一九七二)「アイヌ語沙流方言の人称の種類」『言語研究』六一

知里真志保(一九四二)「アイヌ語法研究」『知里真志保著作集』
第三卷(一九七三)平凡社所収

知里真志保(一九五四)「アイヌの神謡」『北方文化研究報告』
第九輯

知里真志保(一九六〇)「アイヌに伝承される歌舞詞曲に関する調査研究」『知里真志保著作集』第二卷(一九七三)平凡社所収

中川裕(一九九七a)「アイヌ文学 総論 五 アイヌ文学の
人称」久保田淳他編『岩波講座 日本文学史』第十七卷

中川裕(一九九七b)『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリー
中川裕(二〇一一)「アイヌの神謡における叙述者の人称」『北
方言語研究』創刊号 北海道大学院文学研究科

(なかがわ・ひろし／千葉大学)
(編集注)

本稿は、第三四回日本口承文芸学会大会シンポジウム「うた・語りにおける人称―だれが語り歌うのか」(二〇一〇年六月六日)における発表内容を、一般論文として掲載したものである。